2014年『世間胸算用』【現代語訳】

東大合格 オンライン 敬天塾

分限（ぶんげん）になりける者は、その生まれつき格別なり。
金持ちになった者は、その生まれつきから（持っているものが）格別である。

ある人の息子（むすこ）、九歳より十二の歳の暮れまで、手習（てならひ）
ある人の息子が、9歳から12歳の年末まで、書道教室

につかはしけるに、その間（あひだ）の筆の軸（ぢく）を集め、その
に通わせたところ、その間の（自分が使った）筆の軸を集め、

ほか人の捨てたるをも取りためて、ほどなく十三の
他の人が捨てたのも取り溜めて、間もなく13歳の

春、我が手細工（てざいく）にして軸簾（ぢくすだれ）をこしらへ、一つを
春、自分の手作業で、軸の簾を作り、一つを

一匁五分（もんめふん）づつの、三つまで売り払ひ、はじめて銀
銀貨一匁五分を、3つも売り払い、初めて銀貨

四匁五分まうけしこと、我が子ながらただものに
四匁五分を儲けたことを、「我が子ながら、只者では

あらずと、親の身にしては嬉（うれ）しさのあまりに、手習
ない」と、親の立場としては嬉しさのあまりに、（子の）書道

の師匠に語りければ、師の坊、このことをよしとは
の師匠に語ったところ、師匠である坊主は、このことを「良い」とは

誉（ほ）めたまはず。
褒めなさらない。

「我（われ）、この年まで、数百人子供（すひやくにん）を預かりて、指南（しなん）
「私は、この年まで、数百人の子供を預かって、指導

いたして見およびしに、その方（はう）の一子（いつし）のごとく、
しまして、見届けてきましたが、お宅の子供のように、

ア 気のはたらき過ぎたる子供の、末に分限に世を
気が利き過ぎている子供が、晩年に裕福に

暮らしたるためしなし。また、乞食するほどの身代
暮らした例は無い。　また、乞食するほどの身の上に
にもならぬもの、中分より下の渡世をするもの
はならないものの、中から下の職業をするものである。
なり。かかることには、さまざまの子細あること
このようなことには、様々な詳しい理由があること
なり。そなたの子ばかりを、かしこきやうに思し
である。あなたの子供だけを、賢いようにお思いになり
めすな。
なさるな。
それよりは、イ手まはしのかしこき子供あり。
あなたの子供より、うまく手配してお金を稼ぐ、ずる賢い子供がいる。
我が当番の日はいふにおよばず、人の番の日も、箒
自分が当番の日は言うまでもなく、他の人が当番の日も箒を
取りどり座敷掃きて、あまたの子供が毎日つかひ
取って座敷を掃いて、多数の子供が毎日使い
捨てたる反古のまろめたるを、一枚一枚皺のばし
捨てた半紙を丸めたのを、一枚一枚皺をのばして、
て、日ごとに屏風屋へ売りて帰るもあり。
毎日屏風屋へ売って帰る子供もいる。
これは、筆の軸を簾の思ひつきよりは、当分の用に
これは、筆の軸を簾にする思いつきよりは、すぐに役に立つことで
立つことながら、これもよろしからず。
はあるけれども、これもよろしくない。
またある子は、紙の余慶持ち来たりて、紙つかひ
またある子は、余分の紙を持ってきて、紙を使い
過ごして不自由なる子供に、一日一倍ましの利にて
過ぎて困っている子供に、一日あたり倍の利率で

これを貸し、年中に積もりての徳心、何ほどといふ
（これを貸し、年内に積った利益は、この上なく大きい。）
限りもなし。ウこれらは皆、それぞれの親の
（これらはみな、それぞれの親の）
せちがしこき気を見習ひ、自然と出るおのれおのれ
（利害損得にこだわる気質を見習い（やったことで）、自然と発生した各々）
が知恵にはあらず。
（の知恵ではない。）
その中にもひとりの子は、父母の朝夕仰せられし
（その（いろんな子供の）中にもある一人の子は、父母が朝夕に仰ったのは）
は、『ほかのことなく、手習を精に入れよ。成人し
（『他のこと（に見向きすること）なく、書道に精神を注ぎなさい。（それが）成人し）
てのその身のためになること』との言葉、エ反古には
（てあなたのためになる秘訣だ』との言葉を、無駄には）
なりがたしと、明け暮れ読み書きに油断なく、後に
（なりにくい（はずだ）と、明け暮れ読み書きに（手中して）油断することが無く、後には）
は兄弟子どもにすぐれて能書になりぬ。オこの心
（兄弟子達よりも（字が）優れて、達筆になった。この（親の言葉通り、書道に専念）
からは、ゆくする分限になる所見えたり。その子細
（する）心からは、将来裕福になることが見えた。その詳しい理由）
は、一筋に家業かせぐ故なり。惣じて親よりし続き
（は、一心に家業に打ち込む（はず）だからだ。一般的に、親の代から続いている）
たる家職のほかに、商売を替へてし続きたるはまれ
（家業の他に、商売を替えて続いているのは稀）
なり。手習子どもも、カおのれが役目の手を書くこと
（である。書道の生徒も、自分の役目である書道は）
はほかになし、若年の時よりすすどく、無用の欲心
（ほったらかしにし、幼い頃から鋭く抜け目がなく、無駄に欲深い（のは）

なり。それゆゑ、第一の、手は書かざることの
良くない）。だから、　第一の（本分である）書道をしないことは
あさまし。その子なれども、さやうの心入れ、
呆れる。　その（筆軸で簾を作って売った）子であっても、そのように（書道以外に）注力する
よき事とはいひがたし。キとかく少年の時は、花を
のは、良いこととは言い難い。　とにかく、幼い頃は　花を
むしり、紙鳥をのぼし、知恵付時に身を持ちかため
（いか）　（ちえづきどき）
むしって凧揚げ（するような外遊びを行い）、　学ぶべき年齢になったら将来のために学ぶのが、
たるこそ、道の常なれ。七十になる者の申せしし
王道である。　七十歳になる者の申し上げた
こと、ゆくすゑを見給へ」と言ひ置かれし。
こと、　将来を御覧なさい」と言い置かれた。い難い。